●緑蔭図書紹介●

飛ぶことと見ること

中村弓子

物の見え方というのは眼の位置によって非常に違ってくる。たとえば小さな子供と一緒に散歩をすると、思わぬ所で一緒に立ち止まされて初めて、自分にはどぶ沿いに咲いた小さな花が見えていなかったことに気がつく。しかしまた眼の位置が地面から更に遙かに高く、たとえば飛行機の高さになったとき、今度は、地面の上にいた時にはわからなかった世界の相貌が見えてくる。自身パイロットであった作家サン＝テグジュペリは、飛行機というものが人間の住む世界に対していかに素晴しい認識の道具となりうるかを、その『人間の大地』の中で見事に実証してみせている。

「飛行機は機械には相違ないが、しかしまたなんと微妙

な分析の道具だろう。この道具がぼくらに大地の真の相貌を発見させてくれる。」

道路というものは、人間の欲望のままに不毛の土地を避けて泉から泉へ、村から村へ、町から町へと連なるものである。そうした地上の曲りくねった道路に沿って大地を認識するとき、人は欺かれてこの世界が湿潤な優しいものだとばかり思いこんでしまう。しかし飛行機の直線的な航路から見るとき発見するのである。「地表の大部分が岩石の、砂原の、塩の集積であって、そこにときおり生命が、廃墟の中に生え残るわずかな苔の程度に、ぽつりぽつりと、花を咲かせているにすぎない事実を。」しかし「廃墟」を背景としてあるだけに生命は、人間は、まさに一種の奇跡として浮き出て見えてくる。アルゼンチンの大平原の夜間飛行の景観をサン＝テグジュペリは次のように描く。「あのともしびの一つ一つは、見わたす限り一面の大海原の中にも、なお人間の心という奇蹟が存在することを示していた。あの一軒では読書をしたり、思索したり、打明け話をしたり（……）またかしこの家で、人は愛しているかもしれなかった。（……）試みなければならないのは、山野のあいだに、ぽつりぽつりと光っているあのともしびたちと心を通じあうことだ。」こうして飛行機は、高い眼の位置から「人間の大地」を見ることを可能にすることによって、一種独特なヒューマニスムの道具となる。

「現代技術のあまりにも急速な進歩に恐れを抱く人々は、目的と手段を混同しているように思われる。（……）飛行機も目的ではなくて一個の道具なのだ。今日機械が人間を損うように見えるのは、もしかすると、かくまで急速な変化のあとを批判するに必要な時間の距離がまだ足りないためかもしれない。」

一九四〇年にサン＝テグジュペリが『戦う操縦士』として出撃に加わったのも、究極のところ、人間の心という「ともしび」が互いに通じ合うことによってはぐくんできた文明を守るためであった。「一つの文明とは、いくたの世紀を通じてゆっくりと獲得された、信仰と習慣と知識との遺産である。これらのものは、しばしば論理

によって正当化することはむずかしい。だが、いずこへかとひとを導きゆく道路と同じように、それ自体によって正当化される。なぜなら、それらは人間に真の拡がりを開示してくれるからである。」文明とはそうした内的空間であり、そうした内的空間を守るために彼は出撃したのだった。だが一方、飛行機は急速に進歩し、この時期にはすでに飛行高度は一万メートルに達しており、これほどの高度に至ると、飛行機はもはや以前のような人間的な道具ではありえない。「一万メートルの高空からながめるとき、もはや人間は存在しない。人間の動きは、この尺度ではもはや読み取れないのだ。」サン＝テグジュペリにとってこうした一万メートル台を飛ぶ新型の飛行機の非人間性は、真の内的空間である文明を破壊しようとする戦争の非人間性と不可分のものとして現われてきている。

「わたしは一万メートルの高空から、ひとつの州ほどの大きさの面積を見おろしている。ところがその全体は、息もつまるほど小さなものになってしまったのだ。いまのわたしは、あの黒い粒のなかで有していた空間よりも小さな空間を有しているにすぎない。

わたしは内的空間を失ってしまったのだ。内的空間が見えなくなっているのだ。だがそれに対して渇きのようなものを覚えている。」

では一万メートルどころではなく一万キロを越える高度を飛ぶ宇宙飛行は更に非人間的なものになっただろうか。昨年出版された立花隆の『宇宙からの帰還』は、高度に技術的なものである宇宙飛行が、実は再び人間的認識の道具となったことを教えてくれる非常に魅力的な本である。それに宇宙飛行は文明という内的空間にも新たな光を与えてくれる。

サン＝テグジュペリは、飛行機が「人間の大地」の素晴しい認識の道具であると言ったが、地球軌道を離れて月に向う宇宙船は、地球という「人間の住まう星」そのものの宇宙における相貌を発見させてくれる。それは宇宙の死の暗闇の中にぽつんと青く光るマーブル玉である。大気と水が作り出すその青さがどんなに美しいかは

けっして写真では伝わらない、と飛行士たちはあかず強調する。この「青い星」があまりに美しいので、それが何らの意志なしに偶然のみによってできたとはとても信じられない、とも彼らは言う。地球から宇宙を見たときパスカルは「無限の宇宙の永遠の沈黙は私を恐れさせる。」と言った。今度はその宇宙のほうから地球を見ると、その気味の悪い沈黙の中に、比類のない美しさで「青い星」地球が輝いているのである。ちょうど荒漠とした大地の中に点在する生命の花のように。「地球は宇宙のオアシスだ。」とある飛行士は言った。

そのような特権的な星としての地球を宇宙から眺めたとき飛行士たちが一様に感じていること、それは「自分はいま神の眼で地球を見ている。」ということである。それは一種の神秘体験であって、飛行士たちはいわばわが意志ならぬ神秘家なのである。それに対して歴史上の偉大な神秘家たちは、この地上にいたまま宇宙感覚を持つことができた人たちだ、とある飛行士は言う。そして、宇宙感覚という特権的体験をその後の日常生活の中にどう適応させるかという飛行士のかかえる問題も、ある意味では、すべての神秘家がかかえた問題であるとも言える。

宇宙飛行の体験が教えてくれるもう一つの重大なこと、それは、同じ地球という星に住むものとしての人類の同一性の強烈な意識である。これほど美しい星に住む同じ地球人でありながら、互いに領土やイデオロギーのために血を流し合っていることが信じ難く馬鹿らしく悲しく感じられてくるのである。地球軌道を飛んでベトナム戦争の戦火を夜空に目撃したあと宇宙へ出て美しい地球を眺めたとき飛行士が抱いたというそうした感想を読むとき、私たちにもそれがひしひしと実感されてくる。地球の平面にへばりついて平面的にものを見ている限り、人種も文化も相違ばかりが目につくのであって、宇宙から見ると表面的な相違はけしとんでしまい、違う所も同じだと思うのだ、とある飛行士は言う。平面であったものが球に見えるようになったとき、同じホモ・サピエンスとしての同一性が見えてくるのである。人間の文

明としての内的空間の根本的同一性が理屈でなく実感されるのである。

サン＝テグジュペリは、飛行機の窓ごしに人間の大地を見ることによって「ぼくらはいまにして人間の歴史を読み直しているわけだ」と言った。その意味では宇宙飛行はまさにこの上なく秀れた「歴史の読み直し」であるはずである。そしてたしかに、技術進歩の到達点を示す事件として宇宙飛行・月旅行は大いに注目された。しかし著者も言うように「テクニカルな体験」としての宇宙飛行については充分すぎるほど語る機会は与えられたが、「内的経験」としての宇宙飛行については充分にたずねられることも語られることもなかった。飛行士たちは著者に対して口々に「こんなことを聞かれたのは初めてだ。よく聞いてくれた。」とか「いままで人に充分伝えられなかったことをやっと伝えられたような気がする」とか言っている。宇宙飛行だけに限ったことではなく、技術の進歩の上で注目すべき出来事があった場合、しばしばその内面的、人間的意味は問われることも明らかにされることもないままであることが現代においてはしばしば起こっている。『宇宙からの帰還』という本を読んで覚える幸福感は、私たちの生きる世界の物質的・技術的意味に内面的・人間的意味が追いついたとき私たちが感じる幸福感そのものなのである。

（お茶の水女子大学）

サン＝テグジュペリ『人間の大地』（みすず書房）
〃　『戦う操縦士』（　〃　）
立花　隆『宇宙からの帰還』（中央公論社）